

大森惟中「虎乃巻」にみられるアジア観

白井 ユカリ

一 はじめに

近代に入り、急速な開化を推し進める日本は、清とその属国である朝鮮に対して、未開国あるいは弱小国としてみる視線を持つようになっていく。

明治六年の征韓論、七年の台湾出兵、八年の江華島事件、一二年の琉球処分といった一連の思潮や行動が、そういった認識に基づくものであることは否定できない。江華島条約（九年）で利害のぶつかった日本と清とが、朝鮮半島の支配をめぐる対立を深めていったのは、周知の通りである。

日本の朝鮮介入の背景には、列強の存在があった。明治政府は、隣接する朝鮮が欧米、なかでもロシアの影響下に置かれることは、日本の自主独立が脅かされると捉え、これを怖れたのである。古代以来密接な関係にあった清、朝鮮に対し、あえて欧米基準の視線を持つことで、介入を正当化し、自国を守ろうとしたといえよう。

日・清の対立は、朝鮮における壬午事変（明一五）、甲申事変（明一七）を引き起こし、政府は甲申事変における日本公使の謀略を隠

して、清国軍の攻撃だけを發表したため、大半のメディアは強行論を主張し、清国討つべしとの世論が高まった。その潮流を受けて、二三年の第一回帝国議会で首相・山県有朋は、朝鮮の管制を示唆、藩閥政府は反対派を押さえて軍艦建造費を確保する。

こういった不穏な空気のなか、二三年正月の『読売新聞』（以下『読売』に發表された、大森惟中「虎乃巻」（三日、七日）には、戦争に傾斜しつつある日本への所感が、韜晦の形で表現されている。署名は 三木しげ子 という女性名で、したがって、二重の自己韜晦が施された作品といえる。

大森は、東京大学教授・フェノロサの講演をまとめた『美術真説』（明一五、龍池会）の筆者として現在にその名を留めるが、美術工芸、さらに教育分野での功績にも特筆すべきものがある。東京高等女学校での教え子、木村囀、高塚清花らと、「一派」をなし、二三年から二三年にかけて、庶民を対象とした啓蒙活動を試みたことについては、別に論じた²。

本論では、大森の立ち位置と背景を検証し、それらを踏まえて、「虎乃巻」の深層を読み解き、さらには、作品にみられる大森のアジ

ア観を見定めたいと考えている。

二 一 立ち位置

「日本美術協会」「東京彫工会」等の団体で、日本の伝統美術工芸の振興に尽力したことから、一般的に国粹主義の美術家として認識される大森であるが、内実はどうであったのか。大森が主筆を務めた、美術雑誌『美術園』（明二二・二二・二三・五、天秀社）の言説を中心に、考察してみたい。

第三代主筆に就任した際の「撰理の主旨」（明二二・一〇・二七）では、自らの立場について以下の表明をしている。

世の美術論者が一ツは東洋の画意に偏り一は西洋の画理に泥み、旗鼓相下らず互に駁撃して止まざる者此を以て彼を傾軋せんと欲する殆ど柄鑿の異なるが如し、此特に東洋と西洋と其説の相容れざるのみならず、乃ち日本画の流派を異にする者も亦各その師法とする所を尚び睥睨して相闘くは亦何ぞ（中略）余は始より軒輊を其間に設け偏嗜癖好する所なし

美術的偏向がないとする大森の編集方針は、「五万歳の祝詞」（明二三・二・二四）と題した戯文においてもみてとれる。ここでは、伝統美術振興団体「日本美術協会」会頭・佐野常民と、洋画振興団体「明治美術会」会頭・渡辺洪基に、等しく「千歳」を献上し、同様に、日本美術協会の前田健次郎と、日本美術協会から離反した

「東京美術学校」の岡倉覚三に、等しく「四百歳」を献上している。

実際、誌上には、各会派の動向が掲載され、ジャンルによる選別はみられない。それどころか、大森は、明治美術会の初期からの会員でもあった（『明治美術会報告』明二二・一一・二七）。誌上品評会用に、渡辺洪基所蔵の洋画を借り出し、自身で解説を行うなど、洋画に対しても相応の知識と鑑識眼を持っていた様子うかがわれる。

流派を問わず、いいものはいい、悪いものは悪いと評することを旨とする、大森の美術家としての特徴は、きわめて実用を重んじるところにあったといえる。たとえば、明治美術会の講演では、洋画家にむけて、日本家屋に合った小品の制作や、一般人が購入可能な価格設定を提案し、それらを「需要を弘めんと思ふ」ゆえの「方便」（明治美術会会員に望む「明二三・二・二四」と説明している）。

「戦争の美術」（明二二・九・三〇、二二・二〇/全三回）で推奨する「武者絵」などは、国粹的なイメージが強いが、それも基本は、需要拡大のための方便にみるべきであろう。古人が未だ画かざるモチーフを要請するその内容は、商品価値を高める目的を明確に伝えている。しかし、この記事で最も強調されるのは、「史実重視」という点にある。

足利以前は「武者を画きて半は想像に成る者」で、なかでも上古のものは、其軍装の様さだからならねば知るに由なしであるので、戦争の絵画の題材として適当でなく、さらに、徳川は太平の世であり、今世の兵戦も、武器や戦術の変化により、

其実況を写し易からず といふ理由で、同じく適当でないと思われる。その結果、神武天皇 以来の長き歴史において、戦争の絵画に上すべき事跡 は、織田豊臣二氏の間 にのみみると結論づけられるのである。

このなかで、神功皇后の三韓を征し給へる 絵画を、実証不可能のカテゴリーに入れてゐることは興味深い。他の記事でも、奈良薬師寺の 神功皇后の御像 について、服装 の様子から 神功皇后の御時代 のものではないと断じており、花角力の予報「明二・一・三〇」(これを、美術評論という枠を越えて、当時征韓論の根拠とされた、三韓征伐への言及としてみれば、一般的な国粹主義との乖離が認められよう)。

大森のこだわりは、折衷主義の先の「国風の確立」にあつたと思われる。日本独自の美術を創出することへの要請は、三茂女史の改名で書かれた、「花競上野四季咲」(『読売』明三・七・九、八・八/全一六回)に顯著である。この連載は、第三回内国博覧会(明二三・四、七/於東京上野公園)展示品への批評を、諧謔の文章で綴つたもので、その最終章に 油絵 が置かれる。そこでは、日本固有の題材を西洋由来の手法(=油絵)で描くことを推奨し、それこそが 日本の油絵 であり、美名を海外に輝かす基礎となる との解釈を示している。彼が日本美術至上主義でないことは、所詮大和画では出来得ぬ技 油絵の妙処 等の表現にみてとれよう。

西洋人種の白皙 東洋婦人の緑長 支那画の瀟洒 日本画の優美 を、優劣つけがたい長所の例として挙げるなど(前掲「撰理

の主旨)、大森の言説からは、自国の文化同様、他国の文化を尊重する様が確認される。こういった大森の思想を形成したものは何であろうか。

三 背景

『美術園』「ふみのくさむら」欄に、「訪大森先生呈一律代刺」(明二二・八・二五)と題された一首の漢詩がみられる(実際は「追込み」表記。返り点、圈点は省略)。

此非彼是論何公。公道由来在折衷。

洋水巖山分内外。民風邦俗異西東。

学參欧米多新識。技考古今在旧工。

況又遠遊聞見足。煩君一擊破群蒙。

大森の知人とおぼしき久保榎谷による、大森の思想や来歴を紹介したこの律詩の次韻として、大森も同じ号へ三首の律詩を載せている。内容は、第一首：二〇年に及び宮仕えは否運に終り、半生を費やした学問は非才で、賞賛は過美の語である。第二首：功名を立てられなかつた自分は、君の才芸が日本中に知れ渡ることを期している。思想は早くから西哲に秘を探り、詩風は宋詩の工を求める君に対して、慨嘆に堪えないのは実質が伴わない世間の文学士である。第三首：四年前官吏を退き、もはや趙陞北のような吟情は投げ捨て、ワシントン^{ワシントン}の遊跡を尋ねることも難しい。時に美術を談じ、たまさ

か意匠を論じる程度であるが、近年筆を弄び、諧謔を以て、児女の蒙を醒まさんことを欲する次第である……といったものである。

このうち、第三首の本文は以下の通りである（同前）。

四歳屏居不在公。朝衫已脱襦衣衷。

吟情全擲趙甌北。遊跡難尋華聖東。

時展画図談美術。偶論意匠彫彫工。

近来枉弄神官筆。諧謔欲醒兒女蒙。

この詩と、先の久保の詩を中心に、大森の背景を考察してみたい（以下、書下し文を用い、久保の詩句は（久）、大森の詩句は（大）と表記する）。

「技は古今を考へて旧工を存す」（久）、「時に画図を展じて美術を談じ」（大）、「偶意匠を論じて彫工を励ます」（大）は、主に国粹主義の美術家としての側面を表しており、それは、政府の殖産興業政策の一環、「博覧会事業」と深く関係する。大森は、明治一〇年の第一回内国勸業博覧会以来、亡くなる直前まで、審査官、事務官として活躍し、博覧会の名物男と表現されるほどであった。博覧会事業における美術工芸部門は、輸出品として価値が高い伝統的な製品が中心となり、必然的に大森もその分野の振興に力を注ぐことになった。つまり、先の武者絵のような伝統美術工芸品を、量産化して輸出産業に転換させるのは、彼にとつての「任務」といえた。

しかし、任務を離れた本意は、¹⁰「此は非 彼は是 論何ぞ公ならん」（久）、「公道は由来 折衷に在り」（久）にみるべきであらう。それは、¹¹「経史字集和漢群籍及ヒ西洋語学科二関スル翻訳書等涉淵スル所万餘

卷ナリ」¹⁰ 古今東西を網羅した圧倒的な読書量を礎とした。

「吟情 全く擲つ 趙甌北（大）」として名前を挙げる、趙甌北¹¹ 趙翼は、清の詩人、考証学者である。長年官吏の職にあった趙翼の経歴を、自らと重ねたものと思われる。考証学は、中国明末に興り、実証的なアプローチによって成果をあげ、清代學術の主流となった学問であるが、ここでの趙翼の掲出、師・小島成齋の存在、先の「戦争の美術」等にもみられる考証への強い思い入れは、大森が考証学を受容していたことを推測させて十分といえる。

大森の史実重視の姿勢は、以下の文章においても認められよう。

我邦の太古に於ては、文字といふものなかりしが、応神天皇の時に、三韓より論語千文字を奉りてより、漢字漸くに伝来し、（中略）漢音とは支那の中土、長安洛陽（漢唐の都する所）地方の音にして我邦の留学生入唐して京師に至り伝はる所とす、（中略）仏經の如きは其布教者多く異地より来るを以て、各宗の読經率ね異音を用ひ……

若い人たちに向けて、文字は朝鮮から、音は中国からと説くこの本（『音訓かなつかひ教科書』明二七、長島文昌堂）が、日清戦争のさなかに出版されたことを考え合わせると意味深い。考証に重きを置く大森が、皇国史観から離れたところで、中国や朝鮮への見識を養ったことは、想像に難くない¹⁴。

大森には、自然科学の翻訳本（『博物新編訳解』明一丁三、青山清吉）、英・仏・独三ヶ国語の文法を解説したもの（『初学翻訳文範』明二五―一七、大森惟中）などの著作があり、洋学を身近にしてい

たことが知れるが、その知識は、西洋諸学科二開スル翻訳書 から得たもののみではない。「字は欧米に参じて新識多く」(久)とは、明治八年に渡米し、政府委員として参加した、翌九年の米國・フィラデルフィアでの万国博覧会を指す。その開会式で当時のアメリカ大統領は、万博の目的を、世界平和、文化の進歩、世界貿易にあると語っている。万博体験が、彼に世界的視野をもたらしたことは疑う余地がない。

「遊跡 尋ね難し 華聖東」(大)にみられる、華聖東「ワシントン」は、いわずとした米國初代大統領であるが、これも万博と関連する。フィラデルフィアは、ワシントン在任中の首都であり、大森は滞在中にゆかりの場所を訪ねたものと思われる。ワシントン掲出の理由はそれ以外にも考えられる。幕末に書かれたワシントンの伝記に、安積良斎「話聖東伝」(「洋外紀略」嘉永元 未刊本)がある。良斎は朱子学の大儒でありながら、その態度は折衷的で、洋学の必要を説き、先の伝記ではワシントンを論議した。大森の漢学の師・庄原重墩はこの良斎に従学し、大森は良斎の孫弟子にあたる。ワシントンは党派を否定したことで知られ、良斎も学派争いを不毛としたが、それは大森の 軒輊を其間に設け偏嗜辟好する所なし (前掲「撰理の主旨」と呼応する。ワシントンは、政治は国家的たるべく、諸外国の影響、紛乱は常に之を排除して、亜米利加固有の風をなさねばならぬとも説いた。その思想は、列強の脅威に晒され、条約改正問題に揺れる日本に身を置く大森が、師から継承し、指針としたところであったのかもしれない。

「君を煩はす 一撃して群蒙を破れ」(久)「近来 枉げて裨官の筆を弄び」(大)「諧謔 兒女の蒙を醒まさんと欲す」(大)の具体的な表れが、女性誌『貴女之友』、職工を対象とした『美術園』、小新聞『読売』での文筆活動といえるが、その系譜に連なる「虎乃巻」を、これまでたどった大森の言説を踏まえ、次章で読み解いていきたい。

四 「虎乃巻」

概要

先行研究において、未だ作品全体を論じたものはなく、分類として、パロディやパースク²³ という言及がみられるのみである。

作品は滑稽本の体裁で、(上)(中)(下)の三章からなる。(上)「智に原づく宴会の立茶番」、(中)「仁を象どる滑稽の大饗心」、(下)「勇に因む狂言の切相撲」の章題が付され、(上)の冒頭では、本編に先立ち、作品の眼目が明かされる。

…押し展げたる虎の巻、今年の建斗から思ひ着き、智仁勇の三巻に填め合したる一夜の急案…

虎の巻 は、中国兵法の古典「六韜」²⁴「虎韜巻」に由来し、三巻「三略」も同じく兵書である。「六韜・三略」は、兵法の名著であるそれぞれの書を指すと同時に、広く兵法の極意を意味するといえる。したがってこの前口上は、「上略」「中略」「下略」からなる

『三略』の構成を踏襲して、大森流・兵法の奥義を述べることを告げているとみなせよう。

本編の設定は、よみ売新聞の投書家 が、上野 桜雲台の高楼で催す 新年会 で、内容は、干支に因んだ 虎に寄せたる趣向を、参加者たちが 隠芸 で順次みせていくというものである。新橋や神楽坂の芸者、軽業師や手品師といった芸人も招かれ、来賓は四千五百人余り、たいへんな賑やかさのなかで宴会は進行していく。

構成

(上) 智に原づく宴会の立茶番

前半は、「口上茶番」といった趣で、会場の様子が虎「寅尽くし」で描写され、後半の「立茶番」では、歌舞伎を中心とする演目の「サワリ」のみが、どたばたで演じられる。虎石八郎 大江虎丸 奴虎蔵 といった歌舞伎の役名、虎の威を仮る狐 の講釈など、やはり虎「寅尽くし」で終始する。

(中) 仁を象どる滑稽の大饗応

前半は、宴会場でのやりとりで、虎田 という客が、讃岐屋の金八 と 神楽坂の毘沙吉 という芸者に、虎の子渡 について話して聞かせる。中程は、今日の配膳 内容が、太夫の語り で説明され、聴衆は 真に食合ひのねへ飯の菜だ と感心することしきりである。後半は、庭の情景で、供待の車夫 数百人に、酒や料理が振舞われている。どこからともなく、汁の具が 虎河豚との噂が流れ、怒り上戸 は 此方とらを皆な殺す気 なのだとの腹

が痛み、泣き上戸 はもつすぐ死ぬにちがいないと悲観する。そこに 笑ひ上戸 が現われ、虎の生肝 だという偽薬を与える。二人の 神経の痛みは即時に治 まってしまふ。

(下) 勇に因む狂言の切相撲

(上)(中)は、全体が虎「寅年にちなんだ掛詞と縁語の連想で網羅され、おびたらしい卑俚の詞や疎狂の辞は、言葉遊びの要素が強く、およそ兵法とは結びつかない印象である。名調子で延々と続く虎「寅にまつわる言葉の洪水は、作者の博覧強記を知らしめ、(上)の章題 智 は、あたかも「知識」を指すようである。しかし、(中)の内容は、章題 仁 とは程遠く、作者の意図はいまだみえてこない。

(下)は、全体がひとつの狂言となっている。あらずじは以下の通りである。

ともに虎退治で知られる 加藤清正 と 和藤内(歌舞伎)国性爺合戦の主人公)が舞台上で出くわし、互いに来歴を自慢しているうちに空腹となり、清正は、某は先刻アノ高麗縁のある入側を伝えて、誰か兀良哈といふたら、給使が出て参つたに因てよい物を生擒で参つた といひながら二つの 玉子 を、かたや和藤内は、某は又大明竹のある、椽先を廻つて満州を占込まうと思ふたが取れんに因て此様な椀を奪ふて参た といひながら 鯛椀 を取り出す。

二人はにわかには相手の 弁当 がほしくなり、奪い合いを始めたところに、やはり虎退治で有名な 巴提使(「膳臣巴提使」(六世紀の朝臣)があらわれ、その様な決闘止にして相撲とりませいと

行司を買って出る。勝負がつかず、「水入り」となると、巴提使は何ぞ嫌ひな物入れかへておどろかし遣りたい者ぢや」と、こっそり玉子と饅頭を取り替え、鯛椀に紅を入れる。休息中の二人がそれらを口にするやいなや、清正は饅頭が「毒饅頭」に、和藤内は紅が「人血」に思われ、吐き出してしまふ。口中薬をつけても痛みは増すばかり、ついには歯が一本残らず抜け落ちてしまつてしまふまで、かなしや 悔しや といひながら、清正は 肥後の国、和藤内は 台湾の島へ逃げ帰るところで幕となる。

ここにみられる、二つの玉子と鯛椀の件が、清正の朝鮮から中国東北部への進攻と朝鮮二王子（臨海君・順和君）の生捕り、和藤内のモデルは鄭成功の中国本土占領失敗と台湾支配のパロディであることはいうまでもない。

また、饅頭 は、清正が毒饅頭で暗殺されたといふ俗説を、紅 は、和藤内の異母姉が自身を犠牲にした血を川に流す場面（甘輝館の段）を踏まえたもので、朝鮮を攻めた清正、清に反して台湾を支配した和藤内への処遇からは、それらを否定する寓意を読み取ることもできる。

読解

(下) を抛り所とすれば、作品が、「日本」「清」「朝鮮」の三国関係に言及したものと見方が生まれ、その視点から、(上)(中)(下)として(下)を読解してみる。

(上) 冒頭、会場の様子が以下のように説明される。

さて広座敷の床の間には藤田虎之助（東湖）が虎を詠ぜし七律

の詩軸をかけ、之と向ひ合せて長押の上に吉田寅次郎（松蔭）が虎嘯生風といふ四字を行書にかいたる横額をかけ、連棚の上には唐伯虎が着色画の横巻にて廿四孝中の呉猛の図を披展めせり……

書院造りという日本建築に溶け込む調度の数々、律詩、行書、唐絵はもとより、軸 横額 といった表装文化も、遊ればみな中国に行き着く。続く文章中の 山水 屏風 歩障 もまたしかりである。

『読売』の創刊 四千五百 号にかけた、四千五百の 風 を、上野 桜ヶ丘の見晴 で揚げ、糸を切つて風に放したところ、太平洋を渡つて アトランチックの海岸 に落ちたとする件は、風という玩具が、中国 アジア オセアニア ヨーロッパ アメリカと伝わつた事実を踏まえ、中国文化の影響が日本に留まらないことを表しているといえよう。

後半の茶番狂言の役名は、『忠臣蔵』の大星由良之助、『勳進帳』の弁慶、『関の扉』の関兵衛等、飯の姿の下に眞の姿を待つ人物という共通項を持つ。また、虎は寅にちなんだ役名、諺の列挙は、本来日本にはいない動物の名が、こんなにも日本に浸透していることを再認識させる。考えてみれば、虎は寅年を含む一二支からして、中国の「暦法」なのである。

(中) の 虎の子渡 は、中国の説話で、虎が子を三匹生むと、そのなかには必ず「豹」が一匹いて、ほかの二匹を食らおうとするので、親虎は川を渡る際、運び方に苦慮するという内容を持つが、

注目されるのは、豹の歳を二十四としている点である。明治の年号とほぼ等しいことから、豹とは維新で生まれた日本を指していると考えられ、だとすれば、三つ子の虎は、日・清・朝で、虎田の話は、日本が豹変して、同胞である清と朝鮮に牙を剥いている、との読み替えができる。

続く「食合ひ」には、「食い合つ」(互いに相手の領分を侵す)の意が掛けられ、したがって、三國間の侵略を示唆しているものと思われる。

最後の「三人上戸」は、歌舞伎や浄瑠璃でお馴染みの趣向であるが、ここでは「三」という数字に着目すべきで、(下)との関わりを考えれば、三つ子の虎同様、三國關係を象徴しているとみなせよう。三國が根拠のない噂に振り回され、怒ったり泣いたりして、神經の痛みを引き起こしているとの含意が読み取れる。

(下)の清正と和藤内は、朝鮮と台湾の両方をほしがり、自身の経緯は棚にあげて相手を、どろ棒扱ひするが、結果的に清正は玉子、朝鮮、和藤内は鯛焼、台湾という、自らが略奪したもつから仕返しをされるところに眼目がある。ではこの寓話において、和藤内のアイデンティティをどうみるべきか。中国人の父と日本人の母を持つ歌舞伎の和藤内の名は、「和でも唐でも無い」に由来する。そのモデルとなった明の遺臣・実在の鄭成功は、「反清復明」を使命とし、立脚点は大陸にあった。対する作中の和藤内は、信仰する神道の禊詞や太鼓の音のオノマトペを繰り返し、六太松明を手に清正に挑みかかるなど、日本神道の権化としての側面ばかりが強調されている。

作中の和藤内は、清の表象ではなく、相撲で優勢を競う清正ともども、日本の表象とみなせよう。したがって作者は、日本の表象を否定していると解釈できる。

一方、巴提使の人選は、虎退治伝説を持つ人物で、かつ侵略をしていないことに拠ると思われる。さらに深読みするならば、巴提使を百済に派遣した欽明天皇の御代に、征韓論の根拠とされる任那が滅亡しており、人選にはそういった含みも想定されよう。

考察

(上)の茶番劇で踏襲される、歌舞伎「勸進帳」は、一般に、弁慶が「智」、富樫が「仁」、義経が「勇」を体現しているとみなされ、三位一体の「智仁勇」は、『中庸』の「知仁勇三者天下之達徳也」の一節を彷彿とさせる。作品タイトルにおける「智」「仁」「勇」は、作品内容に鑑みて、兵法に記される、戦に勝つための将の条件としてのそれよりも、儒教の徳目として理解されるべきであろう。

(上)では、韜晦に満ちた文章の、表層下の真実を見抜くことを「智」としていると考えられる。それはすなわち、古代以来の大陸との文化交流の再認識、さらには、明治政府の発表、新聞報道の裏側にある、真偽の判別への要請と読み替えることができよう。

(中)では、日本の豹変と、それに伴う三國間の疑心暗鬼を描き、その解決を「仁」の思想に求めている。章末は、三人上戸の誤解が解け、三人一度にとらぶくく、と結ばれ、「福」を掛けたこの終わり方からは、他者への思いやりと自己抑制であるところの仁を全うすることで、三國間の信頼が回復するとの見解がうかがわれる。

(下)からは、日本の朝鮮、台湾への武力介入の否定という寓意が読みとれる。よって、ここでの「勇」とは、戦わない勇氣といつてよい。この章では、二人の英雄を道化とし、清正の法華経信仰、和藤内の伊勢信仰を揶揄するなど、「禁じ手」²⁷ともいえる内容が盛り込まれている。(中)でも、讃岐の金刀比羅宮を寓する 讃岐屋の金八、神楽坂善国寺の毘沙門天を寓する 神楽坂の毘沙吉 という芸者が 凹ませられ る場面が描かれ、これらは、伊勢参り、金比羅参り、法華経に縁の深い毘沙門祈願といった、民間信仰を否定する意図を感じさせる。作者には、現世利益を求め、拜金主義を助長する迷信、盲信の流行が、日本人の精神を後退させるとの危惧があったのかもしれない。

こついった主張の先にある、大森の「虎乃巻」は兵法の奥義とはなにか。逆説的ながら、相手の裏をかくことを基本とする兵法を用いず、儒教思想を外交の指針とするものとみなすことができよう。もしくは、兵法「虎乃巻」にみられる「詭道」は、小説「虎乃巻」では、パロディ、諷刺といった文体にのみ体现されているといえようか。

日本だけを悪者とする観のある大森の三国関係論であるが、互いをどる棒 と罵り合う清正と和藤内に対して、巴提使は、いや／＼某が存するには和殿たちは其様な濁った者ではありやるまい、只々卵と碗盛をとらんと思ふた計ぢやに因て、どる棒でなくてどる棒ぢや との認識を示す。否定される側に対して、「まだ濁っていない」とする擁護に加え、笑いという逃げ道が与えられていることは

興味深い。同時に、こついった言葉遊びの世界を重ねることで、作者は思想的な形跡を晦ましていてもいえる。

「虎乃巻」は、多義性を備えながらも、そのひとつとして、三国関係への言及があることは間違いないといえよう。作品にいかほどの大森の真実が語られているのかという問題はあるものの、女性名と諷刺の文章という、二重の隠れ蓑を用いてまで語ろうとした内容に、本心の吐露をみることは自然と思われ。

では、「虎乃巻」にみられる大森の三国観、アジア観は、時代のなかで、どついった位置づけにあるのだろうか。

五 アジア観

明治初年以來の緊迫したアジア情勢のなか、アジア諸國の提携によつて、欧米列強の脅威を排除し、アジアの自立をめざす、アジア主義という思想が生まれる。³¹日本においては、明治一三年設立の「興亞会」が、アジア主義(興亞主義)団体の嚆矢とされる(一六年に「亞細亞協會」と改称)。

黒木彬文氏によれば、会の中心は、他國への介入を繰り返す藩閥政府に否定的な、非藩閥の政治家、知識層、自由民権者たちで、欧化主義一色の世にあつて、清、朝鮮との連携を謳うことは、異端に位置したといふ。会員たちは、それぞれ微妙に立場を異にししながら、以下の二つの理念に関しては一致していた。

通商貿易という経済主導によるアジア提携論であり、経済による相互交流を通して平和関係の創出を志向した。

朝鮮中国が日本を信用せずに疑う原因を作り出したのは日本側に責任がある、との認識を持っていた。³³

「虎乃巻」が主張していることは明らかといえるが、いついてはどうか。実は、「虎乃巻」と同時掲載の、木村曙「わか松」(三日一〇日)は、の主張を内包すると考えられるのである。

「わか松」は、表層は男女三人の恋愛物語でありながら、深層には博多港が「袖漢」と呼ばれた時代への回顧が看取される。袖漢時代、それは平安末期、博多を大陸貿易の玄関口として、豊かな人材、物資、文化の交流がなされ、日本のみならずアジア各国が栄えた平和貿易の時代であった。タイトル「わか松」と、物語の舞台「博多 唐津」は、古代、大陸文化が伝わる道であった、唐津街道「若松 博多 唐津の経路に沿っており、「わか松」は、古の国際交流に範を求めるという提言を隠し持っているともみせる。³⁵

文学上の師弟関係にある大森と曙とが、亜細亜協会の二大理念を作品化していることは、興味深いといえる。会員名簿に大森の名前は認められないものの、協会の思想を身近にしていたとみてよいであろう。

影響関係が想定される人物として、協会の実質的指導者であった渡辺洪基³⁶がいる。「虎乃巻」執筆当時、渡辺と大森が、明治美術会雑誌『美術園』を通して、懇意な間柄であったことは先に述べた。二人は、東京彫工会の会頭(渡辺)と、幹事(大森)の関係にもあ

り、大森が渡辺を介して協会の理念に触れ、その理念を庶民に啓蒙すべく、通俗的な読み物の形で作品化した可能性は高いと思われる。

ただし、協会の日本人会員の多くが、本音の部分では、文明開化史観に基づいた、清、朝鮮への優越感情を持ち、なかでも朝鮮に対しては、下位にみる視線を有していたと黒木氏は指摘する。協会内において、両国への優越感情を一切持たず、三国を完全に対等とみなして提携を主張したのは、惟一、中村正直ら同人社グループ数名のみであったという。³⁷

中村の漢詩(明一九)には、三国同盟への願望がみとれる。

日本支那及朝鮮。三邦合盟金石堅。輔車相依唇齒全。猶如同氣連枝然。³⁸

三国を連枝「兄弟」とみる視線は、「三つ子」の虎とみるそれと等しいといえる。³⁹

大森の著作、『外史訳語』(明七・千鐘房、青山堂共同刊行)の「序」は、中村の手になり、このなかで中村は、大森を「友人」と表現している。後年も、互いの住居のある小石川区の衛生会での同席が確認され(「小石川区衛生会」、『読売』明二・七・二八)、接点が証される。⁴⁰

儒学の「道」の思想を、国内のみならず世界にまで押し広げ、それによって、国家平等観を持つに至ったとされる中村は、安積良斎門下で、儒学思想を信奉し、漢学を友とし、西洋を受容していた点において、大森と共通する。⁴²一方で、国益を優先しなかつた中村に対して、大森は国益が常に念頭にあったといえ、その点で相違する。

儒学ということでは、明治九年、西村茂樹らによって結成された「東京修身社」は、二〇年「日本弘道会」と改称し、儒教精神を柱とする国民道徳の興隆につとめていた。非合理的な信仰を否定する点も含め、「虎乃巻」⁴³との一致がみられるもの、日清戦争前、西村の三国問題への言及はなされておらず、そのアジア観は明らかではない。

六 おわりに

大森の国粹主義は、殖産興業を基本としたもので、他国の文化の排斥を伴うそれは一線を画していたといえる。亜細亞協会の会員が、重なる部分を持ちながらも、それぞれ立場を異にしたように、国粹主義という括りにも、さまざまな考え方が含まれることは、確認されるべきであろう。国家の博覧会事業の一翼を担った大森であるが、三国関係に関しては、政府の戦略を否定する立場にあったと思われる。

大森のなかには、一方に、国粹主義があり、もう一方に、学問や万博体験に依拠するところの国家平等主義や非戦主義があったことが推測される。大森が、歌舞伎や落語といった日本固有の文化を好み、多くの国民同様、西洋に侵食された日本が、独立自尊を取り戻すことを切望していたとしても、「虎乃巻」にみられる、「維新で生まれた日本が、同胞である清と朝鮮に牙を剥いている」といった内

容に鑑みて、大森の国粹主義は、帝国主義とは直結しないと考えてよいであろう。少なくとも作品時点では、むしろ国家平等主義に接近するとみなすべきではないか。

「虎乃巻」は、政府やメディアによって、まちがった歴史認識を植えつけられ、近々の国際関係における事実を知り得ず、清、朝鮮への悪感情を増長させる一般庶民の、蒙を醒ます目的で、諧謔の形をとって書かれた作品と解釈できる。かつての民権論者が国権論者へと変貌し、民権新聞までもが開戦を支持するなか、明治三三年正月の『読売』に、「虎之巻」が掲載されたことは、注目されてよいことがらと思われる。

注1 拙論「曙一派」の提言」、『實踐國文學』平成二二年一〇月

参照。

2 拙論「木村曙と独幹教史」、『日本近代文学』平成一八年五月。

3 大森の盟友・前田香雪は「美術の心得」、『美術園』明治二二年一〇月二七日)で、絵画を好みて自ら能くせんと心懸る者ならば和漢洋古今雅俗を問はず広く見ることが必要と説き、大森の編集方針を輔翼している。

4 渡辺洪基は東京彫工会と明治美術会の会頭を兼任、大森も双方の会員であるなど、当時、国粹派、西洋派、保守派、革新派の線引きは、混沌としていたものと思われる。なお、東京彫工会の会員には、「工部美術学校」出身の西洋彫刻家もいたが、多くは江戸の伝統を受け継ぐ職人であり、会の傾向は国粹的とい

えた。

- 5 同時に、「かつて目にした豊臣秀吉の朝鮮出兵を描いた絵画は、史実に即しているがゆえに感銘を受けた」とも述べている。朝鮮出兵が失敗に終わった史実を考えると、意味深長といえよう。
- 6 「歴史画の必要」では、歴史画は西洋画の得意分野であるとして、日本の洋画家に歴史的テーマの選択を求めている（『美術園』明治三二年二月三〇日）。
- 7 西洋の彫刻家の如く己れが細君を裸体にして其身体を写すも可なり ありとあらゆる、術を尽して以て其道を研究 するべき、との見解がみられる（「工寮の仕入方」『東京彫工会報告』明治三二年八月二八日）。
- 8 詩題「松谷君見訪辱賜一詩。余偶外出不得会晤。遺憾曷勝因次其韻却呈」。署名「大森解谷。第一首。戴門幾度引猷公。未得清談披寸衷。久慕龍材空冀北。自慙家性老遼東。宦絰廿歲運終否。學費半生文欠工。賞識難當過美語。旧頑不改阿蒙蒙。第二首。延來毛氏黑頭公。聊草蕪詞陳鄙衷。功名嗟我落人後。才去期君鳴日東。哲理夙探西哲秘。詩風遠趁宋詩工。堪慨世間文學士。犬羊之質虎皮蒙。」
- 9 大植四郎『明治過去帳』（昭和四六年、東京美術）。
- 10 自著の「学業履書」（東京都公文書館所蔵、資料番号 616 C806）。明治二〇年九月一六日付。
- 11 趙翼の「文人」批評について、古今の文人達の在り方を検証し、歴史的事実 に即しての公平で妥当な評価を下そうとしてい
- る（中嶋隆蔵『中国の文人像』平成一八年、研文出版）といった言及がみられる。
- 12 日本には江戸中期に伝わり、折衷学派（派にとらわれず、諸説を取捨選択して穏当な説を立てる儒学一派）などを生んだ。
- 13 小島成斎は考証学者、説文学者、書家。大森の学歴。安政年中徳山藩儒狂原文記二從ツテ漢学ヲ受ケ福山藩士児島成育二就テ書法及説文ヲ受ケ爾后独学研究ス又詩ヲ大沼枕山ニ学ビ……（注10に同じ）にその名がみられる。なお、莊原文記 庄原董墩は儒学者、漢学者。大沼枕山 は漢詩人。
- 14 漢字の影響は大きいと思われる。著書に、漢詩集『扛鼎集』（明治一七、一八年、大森惟中）、漢書『文学読本』（明治一九、二〇年、中央堂）等がみられる。
- 15 明治八年米國博覽會事務局官ヲ命セラレ費府二渡航ス（注10に同じ）と記される。
- 16 國雄行（『博覽會の時代』平成一七年、岩田書院）。原文は天下ノ治平二益シ 開化ノ上達ヲ助ケ 万国貿易互市ノ道ヲ広メンカ為メ といったもの。
- 17 箕作省吾「話聖東小伝」が種本とされる（小沢栄一『近代日本史学史の研究 幕末編』吉川弘文館、昭和四一年）。「話聖東小伝」は『坤輿圖識補』（弘化三年）所収。明治以降、通俗的なワシントンの伝記が出版され、一般に浸透した。
- 18 注13に同じ。
- 19 徳山の土人なり、長じて江戸に出て安積良齊、佐藤一齋に

從學し、のち帷を江戸小川町に下し子弟に授く、入門者多し、安政六年篁墩詩抄二巻を刊行せり、文久元年十月十七日歿、年五十二（吉田祥朔『増補近世防長人名辞典』平成一四年、マツノ書店）。

20 良齋の妻と篁墩の妻は姉妹であり（石井研堂『安積良齋詳伝』大正五年、石井研堂）、大森の実弟・謙吉は、篁墩の養子となり、庄原和を名乗る（東京都公文書館蔵、資料番号606 B 209）。良齋と篁墩、篁墩と大森の近い関係がうかがわれる。

21 以上、良齋に関する記述は、中村安宏・村山吉廣『佐藤一斎安積良齋』（平成二〇年、明德出版社）に拠る。良齋は考証学の隆盛を時代の要請として容認し、これを高く評価したと伝えられる。

22 矢代幸雄、井上起『ジョージ・ワシントン』（大正六年、実業之日本社）。

23 平田由美『女性表現の明治史』（平成一二年、岩波書店）。

24 欽明五年一月、百濟・聖明王から高句麗討伐のための援軍要請を受け、天皇は六年三月「臆臣巴提便」を百濟に派遣、結果的に討伐は実現されないまま、同年一月に帰国している（『新編日本古典文学全集 日本書紀』平成八年、小学館）。

25 百濟から仏教が伝来した御代でもある。「臆臣巴提便」の帰国時の奏上は、『最勝王経』捨身品を連想させるとの指摘がある（前掲『新編日本古典文学全集 日本書紀』）。

26 源義経一行が安宅閣にさしかかり、関を守る富樫左衛門の目を欺くために、武蔵坊弁慶が白紙を手にして勸進帳を読み上げるというストーリー。弁慶が本意を隠して、主人である義経を杖で打ち据える様子をみた富樫は、弁慶の忠誠に打たれ、一行の正体を見抜きながらも関を通す。三者三様のあり方に妙味がある。

27 タイトル中の「切相撲」とは、初切相撲「相撲の「禁じ手」をおもしろおかしく紹介する見世物をいう。作者に「禁じ手」との自覚があったものと思われる。

28 金比羅神が「海神」として崇められ、毘沙門天が甲冑をつけた武将形から「軍神」として信仰されたことから、三國間の関係摩擦の要因となっていた「日本海軍」の否定という読みも可能なかもしれない。なお、当時毘沙門天は財宝を守る神として民衆の信仰を集め、寅の日には商売繁盛を祈願する人々で大にぎわいであったという。作品には、芝の毘沙門天（正伝寺）の百足小判「金運守りをばらまく様子が、揶揄的に描かれている。

29 三人上戸のやりとりで、怒り上戸と泣き上戸の「神経」からの腹痛を治したのは、笑い上戸の機知であった。作品における戲謔的な文章は、シリアスな深層を隠蔽するとともに、文体そのものが楽天主義を体現しているとの見方もできよう。

30 たとえば、清正と和藤内には「虎拳」、讃岐の金八には「金比羅」という「お座敷遊び」が掛けられている。

- 31 初期アジア主義の定義。アジア主義は、主張する側の思想、立場、あるいは時代によって内容が異なり、一義的な定義はない。
- 32 黒木彬文「興亜会のアジア主義」、『法政研究』平成一七年三月。
- 33 注32に同じ。
- 34 ヒロインが博多湾（袖湊）で水難事故に会い、そのヒロインの「袖」がキーワードとなって、物語が展開していく。
- 35 拙論「大陸への視線 木村曙「わか松」を中心に」（『成蹊國文』平成二二年三月）。
- 36 越前・福井藩出身で慶応義塾で英学を福沢に学び、一八七一年の政府の遣欧米使節団に参加した。一八七三年にはオーストリア・イタリア駐在代理公使となったことからわかるように、当時の国際通の一人であった。一八七八年に外務省大書記官となり、興亜会副会長になった。（中略）興亜会設立と同時期に地学協会、万年会なども設立し殖産興業にも尽力した（注32に同じ）。
- 37 注32に同じ。
- 38 「高安氏小説題辞」「敬字詩集」（富士川英郎編『詩集 日本漢詩 昭和六三年、汲古書院』）。
- 39 ただし、曙が「わか松」の舞台として、歴史的半島交易の拠点「下関ではなく、大陸交易の拠点」博多を選択していることから、「一派」が、日朝貿易よりも、日清貿易の振興を優先課題

としていたことが推測される。

- 40 大森は、明治一九年九月〜二〇年三月の間、東京高等女学校で国語を教えるが（注10に同じ）、大森の就職に、東京女子師範初代校長・中村が関わっていた可能性が考えられる。なお、「一派」のメンバー、丸橋光子、松本英子も、中村と接点を持つ。中村は、丸橋の女子師範在学時の校長（『東京女子高等師範学校第六臨時教員養成所一覽』昭和一三年、非売品）、松本の父・貞樹の漢学の師、松本の寄宿先・津田仙の親友であった（府馬清『松本英子の生涯』昭和五七年、昭和図書出版）。
- 41 荻原隆『中村敬字研究』（平成二年、早稲田大学出版部）。
- 42 先の丸橋、松本の生涯から看取される理想主義的なコスモポリタリズムが、中村の思想と通底することは興味深い。丸橋は、明治二五年医術開業免許を取得すると（東京都公文書館蔵、資料番号619 C5 06）、日清戦争のさなか、二七年 医術研究の目的で北京に（同、資料番号620 A6 06）、二八年 医術開業の目的で上海に渡り（同、資料番号622 B5 04）、結婚後も再渡清して医療活動を続けた（注35に同じ）。また、明治三五年に渡米した松本は、昭和三年にその地で亡くなるまで、文筆による非戦活動を続けた（拙論「東京高等女学校の同窓生にみられるシスターフッド」、『日本近代文学』平成二〇年五月）。
- 43 高橋昌郎『西村茂樹』（昭和六二年、吉川弘文館）。
- 44 注2に同じ。

45 明治一八年に民権論者の福沢諭吉が脱亜論を発表すると、これ以降、脱亜入欧と国権主義は日本の外交の主流となった。

46 甲申事変後も、清との非戦論を貫いたのは、『東京横浜毎日新聞』と『朝野新聞』のみだったとする指摘がある(注32に同じ)。

付記 引用は、原則として原本に拠り、旧漢字は新漢字に改め、ルビは適宜省略し、筆者の判断で太字を施した。なお、黒木彬文氏の御論文からは、多くの示唆を与えられ、漢詩の書下しにあたっては、本学・揖斐高教授にご教示を仰いだ。ここに記して厚くお礼申し上げます。